（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	岡　　野　　要
論文題目	ヴォイヴォディナ・ルシン語の移動動詞の研究 ――語彙体系の記述と言語接触による変化を中心に――		

（論文内容の要旨）

本論文は、セルビア北部およびクロアチア東部の一部の自治体で話されるスラヴ系のヴォイヴォディナ・ルシン語における移動を表す動詞の語彙体系を共時的・通時的に考察するものである。

序章で、ルシン人のパンノニア平原への集団移住そして定住後のヴォイヴォディナ・ルシン人コミュニティの形成の歴史をたどり、ルシン人の民族性に関して概観するところから始め、第1部で、ヴォイヴォディナ・ルシン語の移動動詞の語彙体系を記述・分析する。第1章では、当該言語の研究に関する辞書学的・語彙論的研究の成果とその問題点を概観している。ここでは従来のルシン語の辞書学的・語彙論的考究が母語話者による研究に依存しがちなルシン語研究の抱える課題について指摘する。続いて第2章では、本稿の中心的な考察対象である移動動詞の意味の記述に先立って、移動の意味野がどのように構成されているかを踏まえ、基本的な移動と周辺的な移動の2つの下位グループに分けた上で、それぞれのグループにおける移動の諸概念がどのような意味領域を構成し、どのような意味パラメータによって分類されているかを提示している。その上で第3章では、ルシン語の移動動詞をそれぞれの意味領域ごとに分析し、意味の近い動詞間で置換が可能な場合とそうでない場合の意味の差など、辞書の記述では不十分な語彙のふるまいについても分析を行っている。第4章では、さらに具体的に、ルシン語の水環境における移動を表す動詞をスラヴ語の語源研究の観点から考察しようとしている。スラヴ諸語は文法体系および語彙の相似性が高いことで知られているが、同じ語源から発達した語彙であっても、それぞれの言語における意味的・統語的なふるまいは異なることが多い。スラヴ祖語の語彙層に起源を有するルシン語の動詞の意味と語彙体系における位置づけを考察することで、ルシン語の動詞研究をスラヴ語語源研究およびスラヴ諸語の比較・対照研究というコンテクストと関連付けている。

第2部では、ヴォイヴォディナ・ルシン語の移動動詞に見られる言語変化とセルビア語およびクロアチア語との言語接触の関係を考察の対象としている。第5章では、ルシン語の移動動詞の一部がもつ定と不定の区別について考察している。ロシア語・ポーランド語をはじめとする北スラヴ諸語には移動動詞の一部が定動詞と不定動詞の区別をもつことが知られているが、ルシン語にもこの区別が存在する。この第5章では、これまで詳細に記述されることのなかったルシン語のこの定・不定のカテゴリーの体系を詳細に分析している。この分析に基づき第6章では、ルシン語の運動動詞の一部が、セルビア語・クロアチア語との言語接触により定と不定の区別を失い混同して用いられる現象を取り上

げ、言語接触に起因する言語変化の問題を取り上げている。運動動詞から派生した動名詞の使用にも定と不定の混同が見られることを指摘し、動名詞の使用にも言語接触による優勢言語の影響があることを説得的に論じている。従来のルシン語研究、とりわけルシン語母語話者によるルシン語研究では、ルシン語らしくない語彙や表現をセルビア語を中心とする接触言語からの干渉と捉えることが多く、もともとあったとされる、よりルシン語らしい語彙や表現を用いるべきだと指摘するのみで、言語変化の本質に触れたものはほとんどなかった。このような研究状況に鑑みて、本論文では、ルシン語と長きにわたり接触してきたセルビア語およびクロアチア語からの影響を考慮に入れることで、これまで単なる言語干渉とされてきた現象にも踏み込んだ考察を行っている。このように本論文では、第1部で、人間の認知活動において基本的で重要な概念の１つである移動をキーワードに据え、移動動詞に関する詳細な分析の結果をまとめあげた上で、第2部でスラヴ諸語に特徴的な移動動詞の定と不定の区別がルシン語においてどのように反映されているかを記述・分析し、ルシン人が居住する地域の国家公用語であるセルビア語およびクロアチア語との言語接触の結果、定動詞と不定動詞の区別を持つカテゴリーにどのような変化が生じているかについて考究している。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文「ヴォイヴォディナ・ルシン語の移動動詞の研究」は、ルシン語の語彙体系の記述および周辺のスラヴ諸語との言語接触により生じた言語変化に関する体系的な考究である。

本論文では、これまでに刊行されている主なヴォイヴォディナ・ルシン語の辞書から収集した動詞語彙目録をもとに約80の移動を表す動詞の意味を体系的に分析している。それぞれ個々の動詞の記述に当たり、移動の意味野(semantic field)を想定し、この意味野のどのフレームが語彙化されるか、そして語彙化に当たり、どのような意味パラメータが関与するかを明らかにしている点で記述が従来の先行研究より明快になっていることが評価できる。意味野には、具体的な概念を表す意味領域 (semantic zone) があり、これらの意味領域は類型論的に普遍的な意味パラメータおよび個別言語に特徴的な意味パラメータによりさらに具体的なフレームに分類される。これらのフレームが当該のヴォイヴォディナ・ルシン語において、どのように語彙化されるかを記述・分析し、移動動詞の語彙がどのような体系性を有するかを示すことが本稿の主要な課題である。

本論文の対象が、セルビア北部およびクロアチア東部の諸地域に母語話者が13,000人程度しかいないスラヴ系の小さな言語であるため、今日まで移動動詞の記述は、セルビア本国のルシン語研究およびその他のルシン人居住地域のルシン語研究おいても取り上げられることがなく、本論文はルシン語研究において長い間見過ごされてきた語彙論的研究を補強し、かつ、文法構造や借用語研究に比べると研究の遅れている文章語一般の語彙論研究を進めるための方法論的基盤を構築するという目的も十分に果たしている。

また、ヴォイヴォディナ・ルシン語は、他の現代スラヴ諸語と同様、共通スラヴ語から継承した共通の文法的特徴および語彙を有するが、この言語が独自に発展させた特徴をも併せもつとされる。このルシン語から得られるデータはスラヴ語研究一般においても意義あるものである。併せて、少数言語・危機言語といった小さな言語がより大きい言語と接触することで、どのように変化しうるのかという、言語研究一般に共通する問題について検討する可能性をもたらすことにもなる。

ただし、本論文が語法研究の一環として辞書作りなどの基礎資料となる可能性を秘めてはいるものの、理論志向性にやや欠けるきらいがあることも確かである。言語変化の説明が若干、仮説的にとどまっている印象を与えるのは、例えば意味拡張などに言及しつつも説明の原理として、なお旧来通り言語接触に起因すると想定している点にある。さらに、話し言葉性あるいは書き言葉のジャンル等も考慮に加え、より総合的に捉え直す必要性が感じられる。ただ、従来、移動動詞に見られる変化について研究が皆無だったことを考慮すると、本論文における分析により、このテーマは一定程度、達成が見られたと考えられる。言語資料が限られているなどの理由により、十分に記述・分析ができていない諸点が残っているのも事実である。こうした課題は今

後、時間をかけてじっくりと向き合ってもらいたい。全体として、本論文はルシン語の語彙の体系的記述を試みた実証的研究であり、方法論的にも独創性の高さが窺われる緻密な言語研究であるとの評価をすることができる。

このように本学位申請論文は、当該領域における研究現状の把握や方法論の確立等、説得力のある記述がなされており博士論文の水準に十分達していると言える。また本論文は、共生人間学専攻言語科学講座の理念に叶ったものであり、言語の構造・意味等に関わる言語のメカニズムを解明する基礎研究として高く評価できると共に、今後の言語学および関連分野への貢献が大いに期待できる。よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。

令和元年11月2日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものとし、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降